珠算漫録（二）

村林專之助

1. 今日學校などで學生から「珠算が上手になるには、何か秘傳でもありますか」と云ふやうな奇問を受けますが、其の時は私は直ぐ斯う答へるのです。「珠算が上手になるのに、秘傳などあるべき筈のものではありません。總べて練習を主とするものに、秘傳とか、たね、仕掛け等のあるものではありません。併し、假りに秘傳なるものがあるとしたら、それは、違算にかまはず、屈せず撓まず、又あせらず怒らず、反覆練習是れ秘傳なりと云ふことが出來ます。凡そ一藝に上達するには、皆此の辛抱が肝腎であります。」と、申してゐますが、どうも今の學生は何事に依らず、早く樂して上手にならうとしてゐるやうです。私はこのことをいつも感じてゐますので次のやうな歌を作つたことがあります。「そろばんは成るべく多く彈くなり合ふも違ふも練習がもと」どんなものでせうか。

2. 大阪の儒者田宮仲宣（文化年中の人か）の著「嗚呼矣草（おこたりぐさ）」に、金銀の利足は利息なり。史記の索隱に、息は猶ほ利といへり。中略。借（か）して子を生ずるがゆゑに息と云ふ。以下略す。

3. 圭算といふ字を、どつかで見たことがありますが、實は自分は之れを、珠算のことか、又は珠算盤のことかとも思ひ、其の內に國漢の先生に伺つて見ようと思つてゐたのです。圭は角ばつてゐる意か、さうして算といふ字が附いてゐますから、前記の如く珠算のことか又は珠算盤のことではないかと思つたのです。然るに寶曆時代（？）の人某氏の南嶺遺稿なる隨筆中、圭算といふもの、古來なかりしものなり。明（みん）朝の頃、日本へわたりしものなり。夫より前は唯文鎭とのみ號して、丸く或は獸形などに作りて用ひたり。以下略。云々とあります。なんだ我々の机の上にある「けいさん」のことかと、今更ながら自分の愚を嗤はないではゐられないのであります。つまり、文字に拘泥した爲めですが、實は「けいさん」の本字を知らぬ結果です。甚だ赤面の至りですが、思ひきつて諸君の御笑草までに書いた次第です。

また、けふ、うかんだ駄句を御目に掛けます。

白雲のはれゝば峯の紅葉かな